

陸、海、空のどこからも脱出できない小さなガザ地区に押し込められたパレスチナ人は、何を頼りに生きているのだろうか、いつも思っている。また、ガザは聖書を読む者にとっては、親しみを覚える地である。エチオピアの女王の全財産を管理する宦官がエルサレム神殿での礼拝を終え、帰途にガザを通り、馬車の中でイザヤ書 53 章の「主の僕の歌」を読んでいた。宦官は去勢され、子孫を残せない。女王に絶対服従するだけの死人のような自分の生活と、理不尽を強いられ死へと追いやられていく「主の僕」の生涯が重なって見えたのであろう。聖書のこの箇所を釘付けになって、見入っていた。そこへ、フィリポが霊に導かれて近づき、聖書の解き明かしをした。フィリポが何を語ったかは記していないが、主イエスの無残に殺された十字架の死によって、あなたの罪は赦され、神からの義をいただいていると語ったに違いない。宦官は死人のような自分が神に「よし」とされる祝福に与っていることを知らされ、福音を信じ、洗礼を受け、喜びに溢れてエチオピアに帰って行った。ガザは、一人の異邦人が救いを受けた喜ばしい地であった。しかし、現在のガザのパレスチナ人たちは希望のない牢獄に閉じ込められている状況である。

『ガザの声を聴け!』を著わした清田明宏氏は、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の保健局長の医師で、約 550 万人のパレスチナ難民救済に関わっている。難民たちの実態を伝えようと本書を著わしている。ガザの総人口は約 194 万人で、空港は破壊され、港湾からの輸出も禁じられ、陸路も検問所が閉じられ、まさに「陸の孤島」状態で、清田氏は「天井のない監獄」と表現している。世界保健機関（WHO）は、普遍的な理念として、「健康とは、肉体的、精神的に、および社会的にも完全に満たされている状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」と定義している。WHOは更に、「霊性（spiritual）」という文言を加えることも検討している。霊性とは、「今、生きていることに感謝し、明日に希望を持って生きられる状態」のことである。これは、ガザが置かれている状況とは真逆の世界で、求めても手に入れることが叶わない価値観である。ガザはイスラム教徒が大半である。60%という世界最高の失業率で、将来に希望が持てないため、イスラム教は自殺を禁じているが、自殺者が出る。過去 10 年で 3 回の大きな戦争があり、「戦争しか知らない子どもたち」の多くは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状に陥っている。また、結核、糖尿病が多い。結核は栄養不足だが、贅沢病とも言われる糖尿病は貧しくてパン食に偏るために発症するらしい。医療体制の不備や器具、薬品不足により、難しい病気に対しては十分な対応ができてない。更に、男尊女卑の傾向が強いため、ドメスティックバイオレンスの悲しい現実がある。妻たちは「うちの旦那に職をくれ」と叫ぶ。貧しさと出口のない閉塞状態は、人の心と体を冒すのである。

ガザから、3 人の中学生と 1 人の引率の先生を日本に招いたことがあった。ガザの現状を日本人に知らせるためである。イスラエルのベングリオン国際空港からは搭乗させてもらえず、隣国ヨルダンのアンマン空港から搭乗しなければならない。ガザからアンマンまでの 150 km間に、諸々の検問を受け、東京の羽田空港に着いたのは、出発してから 4 日後であった。いかに閉ざされた地域にいるかが分かる。東京に着いた少年は小さな声で「ここには、電気がついている……」と呟いた。一日に 2、3 時間しか電気は来ないからである。日本の中学校で、彼らはガザで起こっていることを報告すると、戦争を知らない中学生たちは水を打ったように静まり返って、聞き入った。岩手県の釜石市に行き、津波被害

の大きさに涙し、子どもたちと一緒に凜揚げに興じた。全てのプログラムが終わった後、一人の少年が下記のような感想文を書いた。「わたしは今日、生まれてはじめて、なんの恐怖もなく、自由に走り回りながら遊べました。日本のこどもたちは、いつも鳥のようにあっちこっちを飛び回りながら遊んでいる。わたしも今日、釜石の仲間と一緒に、鳥のように遊ぶことができました。」これを読んで、心に痛みを覚えない人はいないだろう。

最近、ドナルド・トランプ米国大統領の二つの政策がガザに多大な影響を与えている。一つは、エルサレムを公式にイスラエルの首都と認め、米国大使館をエルサレムに移転したことである。イスラエルは1980年に、「統一エルサレムは、イスラエルの不可分・永遠の首都である」とする首都法案を成立させている。しかし、国連の安全保障理事会は「国連加盟国はエルサレムに外交使節を置いてはならない」とする決議（国連安保理決議478）を採択している。この決議は、パレスチナ自治政府もエルサレムを名目上の首都としているので、パレスチナ国家を設立した際の首都問題が絡んでいるからである。トランプ大統領は国際的な約束事を反故にした。彼は大統領選に備え、エルサレムは神がイスラエル人に与えた土地であるとする米国のプロテスタントの原理主義的福音主義教会の支持を得ようとし、また、米国議会に大きな資金で影響を与えているユダヤ人口ロビーからの好意を得ようとして、エルサレムはイスラエルの首都と宣言したのである。パレスチナとイスラエルの「二国家解決案」は完全に葬り去られた訳である。ガザの人々はもちろん、イスラム世界は猛烈に反対した。

もうひとつのトランプ大統領の政策は、UNRWAに対する資金拠出を停止したことである。UNRWAの年間予算は、その約3割を米国からの拠出金に依存してきた。3割が減ると医療、教育、社会福祉の全てに見直しが必要となる。トランプ大統領は自分のためなら、弱い者を足蹴にしても平気な人である。UNRWAは知恵を尽くし、綱渡りの資金集めをせざるを得なくなった。結果的には、カタール、サウジアラビア、クウェート、アラブ首長国連邦など、40ヶ国が拠出金を増額して、米国の財政支援停止の影響は免れ、財政不足は解消した。パレスチナ人に心を寄せ、支援する国は沢山あるということである。

結束力が強く、互いに支え合ってきたガザの社会は今、崩壊しようとしている。他人のことを考える余裕をなくし、自由に移動できれば、大規模な避難民が出る可能性がある。2018年3月30日から、ガザでは毎週金曜日に「帰還の大神行進（グレートマーチ）が行われるようになった。人口の7割に当たる144万人は、自分たちの住んでいた土地を追われ、ガザにやって来た人々で、帰還権を示威する大神行進運動を起こしたのである。ガザとイスラエルを隔てるフェンスに沿って、男女、子ども連れの家族もデモ行進する。そのデモ隊に対し、イスラエル軍は催涙弾や焼夷弾を発砲し、死者と多くの負傷者を出した。イスラエル軍は致命傷になる確率が低い下肢、脚に攻撃を集中するらしい。もちろん死者も出ている。あまりの負傷者に病院は対応できない状態である。全く無謀なデモであるが、母親は子どもたちに「これは、ママにとってどうしてもやらなければいけない使命なの」と言って、国境に向かう。ガザの人々は「尊厳（dignity）」という言葉を頻繁に使う。彼らは国境の向こうに「尊厳」があると思って、フェンス沿いに行進するのである。日本は政治的な荒廃の中で、米国追従しているが、ガザでは日常的に死を賭して、尊厳ある生を求めて闘っている人々が、今もいるのである。清田氏は、国際協力のステップは「感じること」「考えること」「拡げること」であると訴えている。